

インタビュー

人々が集まるまちづくりのために ～震災の日から復幸商店街設立まで

しおたけんいち
塩田賢一さん



40代 男性 気仙沼市在住

東京都で生まれるが、祖父が亡くなったことをきっかけに両親の故郷である気仙沼に転居。高校卒業後、東京で修行し、20代半ばで気仙沼市内にうどん屋を開店し17年間営業。地元で開店したいという思いから、鹿折地区でうどん屋をリニューアルオープンした5ヶ月後に被災する。

■震災日の出来事

—— 震災が起こった時、どこで何をされていたのですか。

塩田 現在（2013年9月）、第十八共徳丸がある、鹿折唐桑駅前から南に約200メートル離れた所に店舗と家がありました。震災があった時には自分の店にいました。地震の揺れは経験したことがあるくらいの大きさでしたが、経験がなかったのは揺れの長さでした。3分弱くらい揺れが続いて、店の中の物が落ちました。それは、今まで経験したことのない長さでした。店の外に出て避難した時、周囲も地震による建物の倒壊はなかったと思います。その後、北側に1キロくらい離れた高台の気仙沼バイパスのほうまで車で近隣の人を避難させました。避難誘導を3度繰り返し、近所の道路に人がいなくなりました。近隣の人を避難させた後、店の前で悠長にタバコを吸っていました。今までこの時ほどの津波を経験したことはなかったから。

すると、地鳴りのようなものすごい大きな音が聞こえたと思ったら、共徳丸が黒い津波に乗って、自分の目線の高さまで押し寄せてきていました。「あっ」と思っている間に、黒い津波が家を押し潰しながら進んできました。進んでくる瓦礫の上に共徳丸が乗って、その右側には木造の2階建ての家が、家ごと浮いていたんです。

それを見た瞬間、これは建物に逃げても駄目だと思いました。車にエンジンを掛けている暇がなかったので、慌てて脇にあった自転車に飛び乗って北側のバイパスのほうに逃げたんです。すぐ後ろから津波が来ていて、このままの速度で行ったら巻かれるのがわかったので、方向を変えて、高台にある線路のほうに逃げました。線路の下に自転車を捨てて、線路の上に駆け上がったら、もう津波が線路を越していたので、ここにいては駄目だと思って、線路の反対側に降りて、木に抱きついて助かりました。それはもう本当にタッチの差ですよね。あの時どこかで躊躇していたら間違いなく巻かれてしまっていた……。

その後、津波が緩くなった時に、丘に上がりました。そこで町が壊滅しているのを目の当たりにしました。人も車も何もかも全部流されているのを見た瞬間「大変なことが起きた」と。

町が壊滅していて、警察も消防も無理だとわかったので、自分らが動くしかないと思って、水が引いた後、すぐ人命救助にあたりました。でも、弱気なことは思わなかつたんです。瞬時に思ったことは、ここを再建するには、私たちの世代の人間が率先して動かないと駄目だということでした。

■復幸マルシェのスタート

—— 鹿折地区で「復幸マルシェ」を設立しようと思った理由を教えてください。

塩田 復興商店街の設立について、他の地域からも声がかかりましたが、どうしても地元のこの地区で再建したいという想いがありました。

設立のきっかけは、震災から2ヶ月後に、中小基盤整備機構という独立行政法人が仮設を建ててくれるという話が持ち上がったことです。それでかつてこの地区にあった「かもめ通り商店街」を運営していた浜商栄会で再建しようという話になりました。

—— 地元で再建したいという想いがあった皆さんにとっては、とてもありがたい話に聞こえますね。

塩田 しかしこの地域は被災状況がひどかったので、「被災していない地区で再建しよう」という話になったんです。被災を免れた人や、避難所で生活している人など、この地区にもそれなりに人が住んでいるのに、人が集まったり、買い物をしたりという場所が一切なかつたので、やっぱりこの鹿折地区で仮設の商店街を作ろうと思ったんです。中小基盤整備機構の制度では「最低2店舗以上の被災店舗、最低200坪の無償の土地を、更地にして用意する」という条件がありました。

—— それはとても広い土地ですね。どのように準備されたのでしょうか。

塩田 まずは、土地の段取りをしなければいけません。国、県、市の土地であれば無償ですが、この時には、もう貸してもらえる所はなかったんです。それで、民間の土地を探し歩きました。5月（2011年）の段階では、いま復幸マルシェがある辺りは被災状況がひどすぎて、瓦礫の量も多く、建築規制があって、仮設を建てることができませんでした。

この地区で人の動線があるのは、いま復幸マルシェがあるこの道路でした。共徳丸があるから人が動くだろうと予測をして、この道路沿いに土地を確保したいと思いました。建築規制が外れるのを待ちながら、できることからやっていました。

—— まずは出来ることから少しづつ進めていったのですね。

塩田 7月後半に建築規制が外れたので、すぐに一番大きな地主さんに声をかけました。

「仮設の商店街を作りたいんですけど、土地を貸していただけませんか」とお願いすると、「俺の土地、千坪あるけれども、お前に全部無償で貸すから好きに使え」と言われて、最初から千坪の土地を確保できたんです。その言葉でやる気になって、残りの地主さんにすぐ交渉にあたりました。

結果、みなさんが賛同してくださって、合計2500坪の土地を、無償で借りることができます。

■瓦礫の山

—— その後、土地をどのように更地にされたのでしょうか。

塩田 基礎やコンクリートが全部剥がされた土地を用意しなければいけないので、そこには瓦礫の山がありました。瓦礫撤去申請要望を出したけれども、市の見解だと半年くらいかかるということでした。とくに県はひどかった。「南（仙台）から復興する」というような言い方をされました。気仙沼市は宮城県の一番北側、鹿折はさらにその一番北側、ということは一番最後でしょう。だったらもう自分でやるわと。

—— 想いがある中で、半年も待っていることはできませんよね。

塩田 大型重機の免許を取りに行き、重機を借りて、自分で片づけ始めました。

トラック、大型特殊、クレーン車など、九種類の免許を取ったので、ほとんどの重機は扱えます。うどん屋ですけどね。

—— どれくらいの期間がかかりましたか。

塩田 4ヶ月かかりました。本當であれば、地元の人達に協力してほしかったけれども、みんな被災していてそのような状況ではありませんでした。手の足らなかつたところを穴埋めしてくれたのが全国からのボランティアでした。毎日、社会福祉協議会やいろんなNPOに電話をして、4～50人集めてもらいました。明るいうちはボランティアに指示を出しながら、側溝の掃除や瓦礫の片づけなどを進めていきました。暗くなつてからは、役所に行つたり申請書を書いたり、店舗集めをしたりしていました。

どうしてもここに仮設商店街を作りたいという想いでしたね。

■念願のグランドオープン

—— どのように店舗集めをされていったのですか。

塩田 「鹿折復興市場建設地」という手作りの看板を道路の両側に設置し、PRを始めました。最初のうちは「瓦礫の山の中で商売が出来るか」という声があり苦労しました。瓦礫が少しずつ片づけ始められると「空いていませんか」という声が聞こえるようになり、アッという間に店舗が集まりましたね。最初断った方が、後から賛同してくれることもありました。

郊外なので、人を呼び込める商店街を作らなければいけません。建物を「コの字」型にして、内側に駐車場を作りました。

「復幸マルシェ」という名前も、ロゴマークのデザインも自分で考えました。

—— そして震災から一年後に、復興商店街がオープンしたのですね。

塩田 震災から1年を待たずしてオープンさせたいという気持ちがあったので、間に合うように、施工業者さんに頑張ってもらいました。その結果、3月10日、11日にグランドオープンすることができました。

—— 難しい状況にあっても、ここで復興商店街を開設したいと思ったのは、この地区に対する愛着があったからでしょうか。

塩田 そうですね。ひどすぎる被災を目の当たりにして、誰かが動かなきやいけないという気持ちがありました。

—— 今後、復幸マルシェをどういった場所にしていきたいと考えていますか。

塩田 ここは建築規制でかさ上げ地域になるものですから、来年(2014年)の3月には撤去する予定です。ここを作る時にはわかっていた話なので、次の手立てとしては、この地区内の違う場所でもう一度仮設を作っていただけることになっています。現在復幸マルシェのある場所はTP(*1)3.5にかさ上げするので、最低3年間は手をつけられません。その間、別の仮設での営業を予定しています。

■解体される第十八共徳丸

—— 現在(2013年9月)、津波で寄せられた第十八共徳丸が解体作業中ですが、解体についてどう思われますか。

塩田 震災直後は、瓦礫も含めすぐに撤去してほしいという気持ちがあったんです。

けれど、復幸マルシェを作る時には、あの共徳丸があるから人の流れがあるだろうと予測したので、残してもらいたいという想いが強かったんです。共徳丸の周りの清掃もしていました。

—— 2013年3月に「住民の7割が共徳丸を残すことに反対」(*2)という記事が新聞に載りましたね。

塩田 地元の人と話しているなかで、反対は6割もいないだろうという感じがありました。

おかしいと思ってその記事を書いた記者に問いただしたんです。今後について市からの説明を受けるため、この地区で300人くらい集まった会で、たまたま議題にはなかった共徳丸の話になったそうです。そこで発言した人が5人いて、そのうちの3人が反対、2人が賛成。それで6割だということだったんです。実は7月頃、私が清掃をしていた時に、共徳丸の界限をうろうろしている人がいたんです。私はその時、復幸マルシェのジャケットを着ていて、その人がちょっと顔を背けたので、これはおかしいと思って話しかけたんですよ。そしたら解体業者だったんです。おそらく8月のアンケート結果前に解体は決まっていたんですよ。7月の段階で調査に来ていた。アンケートって言わされましたよね。私、アンケートを書いていませんから。来ていませんから。誰が対象となって書いたのかという疑問もあるんです。

—— アンケートの対象者や回答率などを明らかにしないと、その数字が客観的な結果なのかわかりませんよね。

塩田 共徳丸は鉄の塊なので、そのまま放置しておくのは危ないと思います。震災から2年半経ってあの船をどうするのか、決めなければいけないということもわかります。

しかし、地元のことに関して、私たちはあの船のことを聞かれる前に、自分らがどこに住めるのか、自分の土地がどうなるのかということが最優先なんですよ。そんななかで船の話をされても「そんなの知ったこっちゃねえ」というのが人間だと思うんですよ。

今の段階で船を残す、残さないというのを冷静に判断して決めるのは難しい。復興途中の段階では、あの船の重要性はまだまだあると思っています。

—— 優先順位に沿って決めていきたいという気持ちはもっともだと思います。

塩田 自分らの土地が決まった、自宅が再建できたという、復興、復旧がある程度進んだ時に、あの船についての議論をさせてくれないかと。いま壊すということには、戸惑う気持ちがあります。

たとえば南三陸の防災センター（*3）、陸前高田の一本松（*4）という有名な所がありますが、これから50年後、100年後に、それを見た時に何を感じますか。説明があればわかりますよ。共徳丸のように町の中にドンと船があつたら、何も言わなくてもある程度の予測がつくじゃないですか。あの船の重要性というのは、インパクトがあって、説明もなしにぱッと見た瞬間に津波の想像ができることです。

—— 一瞬にして伝わってくるものがありますね。

塩田 今までの津波の高さの目印はありました。しかし、どれくらいの威力があったのか伝わってこなかった。あの船が上がっている状況があれば、後世の地元の人達もわかると思う。船がここまで上げられたという威力は相当なものだろうと、何の説明もなしに植えつけられると思うんですよ。

あの船があるおかげで、人がこの地区に来てくれる。気仙沼は港町で魚が有名な所ですが、福島の原発の影響や、震災前から減船などの問題があって、いつまでも水産業だけに頼ってはいられない部分がありました。震災が起きて全国の方々が気仙沼に来てくれているという

ことも考えると、あの船は今後の気仙沼にはなくてはならないものではないかと思うんですけどね。

■さらなる気仙沼の復興に向けて

—— 今後、復興に向けて、どのようなことに取り組みたいと考えていますか。

塩田 鹿折地区のまちづくり協議会で、一番若いのは私なんです。私の次に若い方は60歳ですから、14歳も年上なんですね。

—— 鹿折地区も高齢化が進んでいるんですね。長年地域に寄り添っている人が多いという意味ではよいのですが、今後のこととも考えると若い人も集まってほしいですね。

塩田 阪神・淡路大震災の時は、私たちと比べたらスピーディに復興が進んだと思うんですけど、それでも地元に戻った人は4割しかいなかつたと言われています。うちにはまだこれから5年も6年もかかるなかで、どれくらいの人が戻ってくるのだろうかと考えると、一割も戻らないだろうと思います。鹿折地区で6000人被災して、その1割の600人で、どうやって町を再建するんだと。

鹿折地区を再建したいという想いがあって、みんな動き出していると思うんですけど、地元の人達だけで、今までの流れで町を再建するとしたら、50年、半世紀かかると思うんです。だからこそ、より良いまちづくりのために、人が集まれる場所を作らなきやいけないと思っています。

—— 人が集まる場所を作るために、どのようなことが出来るでしょうか。

塩田 町を2分して、北のほうを住宅地（TP3.5）、海に近い南の低地ゾーンを水産加工団地（TP1.8）にするという計画があります。私が大事だと思うのは、TP1.8の低地の部分です。たとえば海を見に来た観光客は、そこから15分くらい歩いて坂を上ったTP3.5の地域まで行かないと思います。低地の部分は水産加工特区なので、港で揚がった水産物をいち早く販売できる施設を作ろうかなと。このことは組合の会長にも話を通しています。流通コストがかからないので、安く販売することもでき、目玉になるのではないかと思います。

—— 安くて新鮮なものが手に入る場所があったら、地元の方も観光客も集まりそうですね。

塩田 もうひとつ、震災前からの夢だったライブハウスのようなものを作りたい。気仙沼は音楽に関しては有名人も出ている所なんですが、そういった活動をする場所がないんです。実は震災前にもライブハウスの計画を作ったことがあったんですが、物件や予算などの問題で難しかった。学生の軽音部や、地域の方の日本舞踊などの活動場所。練習だけでなく披露できる場所を作りたいんです。公民館ほど大きい場所でなく、予算もかからないような感じで……。

—— 音楽や趣味など、活躍の場が広がりますし、地域の交流の場にもなりますね。

塩田 この地区には、これから三陸道が走るんです。鹿折地区はその出入口になる。他から人を呼び込むにはもってこいの場所なんです。他の地域からも人が集まるような場所を作っ

ていけば、この町は力をつけていくんじゃないかなと。この町が元気になれば、気仙沼全体にも伝わっていくと思うんです。

さまざまな施設ができれば、おのずと人は集まってくるでしょうし、ここが元気になれば、住みやすい所だと感じて人が集まると思うんですよね。仕事場がここにできれば、人が住むことができると思うんです。

—— これからが楽しみになりますね。

塩田 復興が進んだら、復幸マルシェはなくなてもいいと考えているんですよ。そのため作った仮設の商店街ですから。

「復幸」という言葉を外して「気仙沼マルシェ」でもいいじゃないですかとも言われたんです。マルシェを残してくれるのであれば、それはうれしいんですけどね。

2014年9月23日

気仙沼市 復幸マルシェにて

聞き手・太田杏奈

*1 復幸マルシェ

気仙沼市鹿折地区の被災事業者が23店舗集う仮設商店街。2014年8月末に閉鎖され、同年9月より約500メートル南に「鹿折復幸マート」と名称を変更し移設された。

*2 TP (Tokyo Peil)

東京湾平均海面。全国の標高の基準となる水面高さ。

*3 2013年8月には「住民の七割が共徳丸を残すことに反対」

<南三陸防災庁舎 県有化「賛成」6割> 河北新報 2015年5月26日記事より

*4 南三陸の防災センター

南三陸町防災対策庁舎。東日本大震災時、津波で被災する寸前まで防災無線で避難を呼びかけた。

*5 陸前高田の一本松

岩手県陸前高田市で津波に耐えて残った松の木。復興の希望を象徴するモニュメントとして残されている。